

第六章 夕顔の物語(3)

[第一段 四十九日忌の法要]

かの人の四十九日(なななぬか、源氏は夕顔の四十九日の法要を)、忍びて(内々だけで)*比叡の法華堂(ひえのほけだう、延暦寺法華堂)にて(で催したが)、事そがず(内輪とはいへ正式に)、装束よりはじめて(身支度から始まって)、さるべきものども(供え物など)、こまかに(不足無く用意整えて)、誦経(ずきやう、僧に読経を上げてもらう)などせさせたまひぬ(などさせ為された)。経(きやう、お供えの経巻や)、仏(ほとけ、仏像)の飾りまで疎か為らず(おろかならず、十分に施して)、惟光が兄の阿闍梨、いと尊き人にて、二無う(になう、亦と無く立派に)しけり(執り行った)。*とうとう比叡山まで舞台になった。京の北東、大津坂本に在す比叡山延暦寺は最澄を開祖とする天台宗総本山とされる。天台宗は顕教(けんぎょう)で真言宗の密教(みつぎょう)と対する。真言宗総本山はカシハラの南西、紀伊山麓の高野山金剛峯寺(こんごうぶじ)で空海を開祖とする。最澄(767~822)と空海(774~835)は7歳違ひ位の平安初期の仏僧たちであった。そして両者共に第16期の遣唐使節に学僧として、同期だが別船で、派遣された。そしてまた両者共に、長期の留学予定を1~2年という超短期で、其々別々の経緯だが、切り上げて帰国した。帰国後両者は京都北西愛宕山系の高雄山寺で机を交えた事もあったらしいが、結局は決別して其々が日本仏教の大礎石を築いた。二人の決裂は今日、顕教と密教との違いとして説明されているが、真言がインド原語だとすれば、仏典を中国語に翻訳して纏め直した天台派との対比において、両者は原文派と漢文派という技術的な立場の違いにも見える。ともあれ両者が当時最先端の学説によって、奈良仏教の閉塞感を打破したことは確からしい。そういう時運だったか。之に私的な概念整理を試みると、顕教は唯物論で、密教は唯心論、だろうか。顕教は、事象の解析から物理を求め、其の物理で世を律する、と言う男性律の立場に立つ。恐らく比叡山での修行は、救済の戒律自体を追及するもので、そのために細分化された概念項目ごとに学科が設けられて、大学の様相を呈したのだろう。方や密教は、物理を識る心を修め、其の訓えで世を司る、と言う女性律の立場に立つ。恐らく東寺や高野山での修行は、修行者自身の内なる煩悩を断ち切る事こそを根本として瞑想を行い、其れを成し得た者の行政に誤りは無し、とするのだろう。しかし、総論と各論は其々が独立した概念ではなく、したがって別の立場を取るものでもなく、また相互補完作用を為すものとも違って、一つの事象を認識するとき全体と側面を絶えず行き来して多角的に把握しようと試みる思考方法を客観的に言い表したものに過ぎない。要するに同じ事柄を別の角度から見た表現の違いなのだが、男性律と女性律は確かに切れ味が違う。

御書の師(おんふみのし、源氏の漢学の先生)にて、睦しく思す(慣れ親しんでいる)文章博士(もんぜう)はかせ、式部省大学寮の最高位教官に)召して(申し付けて)、願文(がんもん、供養奉文を)作らせたまふ(書かせ為される。その願文の為に源氏は下書きとして)。その人となくて(故人の名を伏せたまま)、あはれと思ひし人の(慈しんだ人の)はかなきさまになりたるを(変わり果てた後の輪廻を)、阿弥陀仏に譲りきこゆるよし(阿弥陀様にお任せして冥福を祈る由を)、あはれげに(悲しげに)書き出でたまへれば(書き出して博士にお見せになると、博士は)、

「ただ(もう)かくながら(このままで)、加ふべきこと(書き加えることは)はべらざめり(無い様で御座います)」と申す。

忍びたまへど(源氏は何も答えず黙ったまま)、御涙もこぼれて(お涙を溢されて)、いみじく思したれば(甚くお嘆きの様子なので、博士は)、

「何人ならむ(故人はどういう方だったのだろう)。その人と聞こえもなく(名の知れた公の人でもないのに)、かう(こうも源氏の君を)思し嘆かすばかりなりけむ(思い嘆かせるばかりにさせるとは)宿世の高さ(何と高い宿縁がある方なのだろう)」

と言ひけり。忍びて(源氏は内々に)調ぜさせたまへりける(誂えさせた供え物の故人用の)装束の袴を取り寄せさせ(とりよせさせ、近くに運ばせ)たまひて(手に取って独詠された)、

「泣く泣くも今日は我が結ふ*下紐を、いづれの世にかとけて見るべき」(和歌 4-16)

「しょうがないから結んであげる、ちゃんとしないと解けぬ下紐」(意識 4-16)

*「下紐(したひも)」は袴用の下着の紐で、人に恋されると自然に解けると曰くされた。「結べ」ば「解ける」し、「結ばない」と「解けない」。「解けず」仕舞いが遣る瀬無い。この期に及んでも更に艶っぽいというか、情感深い哀悼の歌か。

「この*ほどまでは(この七×七=四十九日までは死者の靈魂は中陰に)漂ふなるを(漂うと言うが)、*いづれの道に定まりて赴くらむ」と思ほしやりつつ、念誦(ねんず、念仏)をいとあはれにしたまふ(心を込めて唱え為された)。*仏教では「自業自得」「因果応報」の道德律を説明する時に「輪廻転生」の概念を用いる、という。生命の本質を「不滅靈魂」と考えて生物は、前世―現世―来世、を何度も往来するのだという。前世の悪行で現世の姿と不運が定まり、現世の善行で来世の姿と幸運が期待できる、と説く。其の区切りの期間、即ち一度死して再度生まれ変わるまで釈迦仏の裁定を待つ時間、が「四十九日」なのだといひ「中陰」と呼ぶ。是の考え方は、説法以前に個人の経験則で認識される、他人を厚遇しないと他人からの厚意を期待できない、という行動規範と道義上は合致する概念なので、広く浸透し支持された。*「輪廻」思想において、転生すべき姿は六道に分けられる。地獄道、餓鬼道、畜生道、阿修羅道、人間道、天道、とされていて、源氏は夕顔が善い道に進むように祈ったのだろう。

(このように夕顔の不幸を思うにつけても源氏は、右近から夕顔と頭中将との経緯も確かめて二人の間に出来た女の子の消息も聞いていらしたので、)頭中将を見たまふにも(頭中将とお会いになる時には)、あいなく(妙な気兼ねに)胸騒ぎで、かの撫子の生ひ立つありさま(子供が元気に育っていることも)、聞かせまほしけれど(中将に知らせてやりたかったが)、かことに(夕顔を中将の愛人かと気付いていながら手を出した源氏の色好みと、死に目にも会えなかった薄縁への恨み言を言われるのを)怖ぢて、うち出でたまはず(とても言い出せ為されなかった)。

かの夕顔の宿りには(また夕顔が住んでいた五条の家では女房たちが)、いづ方にと(女君は何処へ行かれたのか)思ひ惑へど、そのままに(素姓の知れぬ殿方に連れ去られたまま)え(何の)尋ねきこえず(便りも知らされずに居た)。右近だに訪れねば(右近さえ顔を見せないの)、あやしと思ひ嘆きあへり(奇怪しいと思ひ嘆き合っていた)。確かならねど(おぼろげながら)、けはひを(言動から)さばかりにやと(それらしい=何か知っている)、ささめきしかば(噂していた)、惟光を託ち蹴れど(かこちけれど、問い詰めてみたが)、いと(まるで)かけ離れ(見当違いと)、気色なく(知らん顔で)言ひなして(答えては)、なほ同じごと(また変わりなく)好き歩きければ(女

房に言い寄って通い続けていたので、いとど(全く)夢の心地して(捕え所を失くして、彼の殿方の狩衣変装に惑わされてか)、「もし(もしかすると)、受領(ずりやう、国司の赴任長官)の子どもの好き好きしきが、頭の君に怖ぢきこえて(中央政務官にして女君を世話していた頭の君を憚って身分を隠して忍び通って)、やがて(そのまま困って)、率て(引き連れて)下りにけるにや(赴任国へ下ってしまったのだろうか)」とぞ、思ひ寄りける(などと相談し合っていた)。

この家主人ぞ(このいえあるじぞ、この家の持ち主は何と)、西の京の(右京で撫子を育てている)乳母の女(めのとのむすめ、乳母の娘)なりける(であった)。三人(みたり、其の家には三人の)その子はありて(其の乳母の子が女君の女房仕えをしていたが)、右近は(側近第一の右近は)他人(ことひと、他人で)なりければ(女君の乳母の子だったので)、「思ひ隔てて(偉ぶって自分からは)、御ありさまを(女君の御様子)聞かせぬなりけり(わたしたちには知らせて来ないのだろう)」と、泣き恋ひけり(と女君を慕い嘆いた)。右近はた(右近のほうも事の顛末を女房たちに知らせれば)、かしかましく言ひ騒がむを思ひて、君も今さらに(源氏の君も今も尚)漏らさじと忍びたまへば(事の露見を避けて居られる事もあって)、若君の上をだに(撫子の引取りの件でさえ)え(とても)聞かず(言い出せず)、あさましく(始末が付かないまま)行方なくて(ゆへなくて、何の進展も無く)過ぎゆく(時だけが過ぎ行く)。

君は、「夢をだに(夢でだけでも)見ばや(会いたい)」と、思しわたるに(思い続けながら)、この法事したまひて(この法事をし為されたが)、またの夜(その法事の翌晩に)、ほのかに(うっすらと)、かのありし院ながら(あの日のあの院で起こった事そのままに)、添ひたりし(枕元に座した)女のさまも同じやうにて見えければ(夢を見たので)、「荒れたりし所に住みけむ物の(ものの、物の怪が)、我に見入れけむ(私に取り付いた)たよりに(崇りで)、かくなりぬること(こうなってしまったのだ)」と、思し出づるにも(と思い出すだけで)ゆゆしくなむ(不吉なこと、であった)。